

## 海軍志願兵の大東亜戦

大分県 朝倉 安治

(旧姓 志村)

私は大正十五（一九二六）年六月十日、大分県大野郡朝地池田で、父 幾、母 松枝の五男四女の九人兄弟の次男に生まれました。ほかに祖父母が健在で、家族は総勢十一人の家族でした。家は農家で、田八反、畑三反の耕作で、畑の作物は、大豆、甘藷、粟等です。

私は後年請われて、朝倉の家を継ぎましたが、三十一歳までは志村安治の名前でした。

学歴は朝地町立上井田尋常小学校高等科を昭和十五（一九四〇）年三月に卒業して、大分市の新川から入った所の人造羊毛製造の『鐘が淵工業株式会社』に入社致しました。会社は寮生活で、全員、鋭意、非常時の生産に邁進しました。

上海事変、支那事変、満州国建国、ノモンハン

事件と国際情勢の緊張の高まりと共に戦争が拡大して来ました。郷党の勧めもあり今こそと憧れの海軍に志願を決意して、昭和十七年九月、大分市内で海軍を受験、見事合格、採用通知が届きました。

当時、戦争は支那全土に戦線が拡大し、ついに昭和十六年十二月八日、ハワイ真珠湾の攻撃で大東亜戦争に突入しましたので、私は日本国興亡の秋と奮って海軍に志願致しました。

昭和十八年四月一日、十八歳で佐世保の相浦第二海兵団に入団致しました。

海兵団への出発は、大分駅前集合して、知名士の激励があり、駅前広場を埋める大勢の見送り人の歓呼の声と日の丸の旗の波に送られて、軍事専用列車で九大線經由佐世保まで、私には彦太郎じいさんが付いて来てくれました。同じ朝地の羽田野正士さんも一緒でした。

大野郡朝地の地域は国道五十七号線に沿い「荒城の月」の岡崎城跡の竹田市と隣あわせの町で、平

安、鎌倉時代より文化の開けた所で、白杵の石仏の時代には、善光寺の特大磨崖仏があります。国東半島の仏教文化の花開いた地域で、平安期荘園の京の都との関わりも深い土地柄でもあります。

用作公園は、彫刻家朝倉文夫、荒城の月の滝廉太郎、頼山陽、田野村竹田などの文人墨客が往来した所であります。また武の面では、平安期は荘司、大野氏の騎馬軍団、鎌倉期より豊後大友の下で志賀氏が岡城に拠り、朝地、大野はその後ろ巻地、特に豊薩の合戦には大友は島津軍に大野川で大敗を喫し、西九州では肥後、肥前の竜造寺でも破れ、破竹の勢いで筑前まで侵攻した薩摩島津の大軍を、孤城よく守り通し、後に秀吉より名将と賞された十九歳の志賀親次の武勇の地であります。明治の白露戦役には旅順港の港口閉塞の任を受け、旅順港口に杉野兵曹長と共に散られた軍神・広瀬中佐の出身地であります。ですから海軍への思いはまた格別なものであります。

入団時の家庭の状況は、父は食糧事務所に、兄

は農協職員、兄嫁は看護婦で、農作業は、祖父彦太郎と母松枝が主力でありました。

さて希望に燃えて海兵団に入団しましたが、新兵教育は峻烈を極めたものでした。起床ラッパに飛び起きて、床上げ、掃除、食事、食事は班長も一緒にするので、その世話も回し当番でやります。少しでも遅れたり悪ければ大変なことになります。一個班は新兵ばかり二十人ほどでした。教班長は下士官のバリバリで班長室は別にありました。班長室、あんな恐ろしい所には入ったことはありません。

六時起床で八時ごろ日課が始まりますが、毎日がピリピリの連続でした。精神注入棒（バット）ですが、カッター訓練競技に負けると昼夜の食事の時、班長に卓上の食事をひっくり返されて、食事抜き、消灯後に精神注入棒で海軍魂を植え付けられました。毎晩、毎晩、何のかんのと、難癖を付けては叩かれました。班長の虫の居所が悪いと当り散らされ、さらに上官に叱られて、そのとば

つちりがこちらにバットが飛ぶと言う具合でした。親が見たらどんなだったろうかと、今考えても胸が熱くなります。

私は整備兵要員ですので整備の教育を受けました。かくて苛烈な初年兵教育も終わり、七月二十五日、大村海軍航空隊に配属になり移動しました。勤務場所は違いましたが、羽田野正志さんも一緒に大村にきました。

大村では整備隊に配属されました。各分隊に二人の新兵が配属されましたが、ここでは兵長クラスが一番恐ろしく困りました。毎晩、甲板整列があります。至る所に精神注入棒が備えつけてありました。ここでは棒のほかに、水に浸けたロープで叩かれる制裁も受けました。ぐるりと回るので痛さが身にしみえます。歯を食いしばって耐えました。機関科はもつと酷かったと聞きました。整備は水上機で、私は器具工具の係りを命じられました。

九月六日、さらに転属が決まりました。今まで

一緒だった正志さんは、木更津航空隊に、私は四国松山海軍航空隊に転属です

四国には大村から汽車で別府に出て、後は船で松山に行きました。途中、別府で台風により小学校の上の山崩れがあり、門徒寺の裏が大変だったと聞きました。

松山では、特攻機『零式艦上戦闘機』の整備に全力を傾注しました。飛行機の数には少なかったように思いました。

後にサイパン島に向う予定の編成替えがあったのですが、私は中耳炎を患って松山の海軍病院に入院しました。ほかの私たちは南方に移動中に台湾沖で敵の潜水艦の魚雷攻撃で沈没されたと聞きました。私は九死に一生を得ました。

海軍病院で四カ月の入院生活を送り、退院後は佐世保海兵団補充隊付き、大村海軍航空隊済州島分遣隊付きとなりました。同航空隊は特攻隊の訓練基地でしたが、済州島は風が強いため訓練には使用できず、部隊は朝鮮釜山付近の亀裏地区に移

動しました。ここで十一月三日の寒い日、鮒を取って来いと上の人が言うので取りに行きましたが、朝鮮の冬の川は凍りついていました。その時は鮒等が取れたと思います。食べたかどうかは覚えてません。上官の誰かが無理を言ったのか、嫌がらせか酷いことです。もちろんこれは明治節のお祝いの魚ではありませんでした。

分隊長は尉官で（大尉か）分隊員は何百人もいました。ちようど陸軍の中隊のような規模でしょう。また分隊には整備隊のほかには様々の隊が一緒でした。飛行場整備の兵科や通信等の所は人員も少なく良くまとまり楽だったようで、本当に羨ましかったです。

昭和二十年六月、大村海軍航空隊付きとなり諫早飛行場に帰り、長崎県小浜町雲仙の特攻基地に勤務して、特攻隊員の愛機の整備に力を尽くしました。雲仙の基地からは多くの若い隊員が鹿児島に向かい、さらに鹿児島から沖縄に向けて出撃し、護国の花と散って行ったと思うと、可哀相で痛ま

しい限りです。

戦争末期ごろは、太刀洗をはじめ各地の航空基地は、アメリカ軍の空爆で使用不可能で、隠れた小さな基地が必要となり、雲仙などにも基地ができたのでしょうか。八月十五日の玉音放送は雲仙の基地でお聞きしました。

基地の撤収については大村の本部の指示から即時に解散というので、それぞれ思い思いで、勝手に雲仙の基地から復員致しました。飛行機乗りで飛行機で帰った人もおりました。私は、四国の人で軍の自動車で別府経由で帰る人に別府まで乗せてもらって帰りました。燃料は満タンにして行き、後で車は別府に放置したと聞きました。

雲仙航空基地の長には思慮深さが無く、軍の器物も勝手に分け取り合戦でした。別府から汽車で朝地に、八月二十日に帰郷しましたが、再度呼び出され、島原の青雲寺で約一カ月ぐらい、雲仙海軍航空隊の残務整理に従事しました。この残務が終了後、本当の復員をしましたが、朝地ではちよ

うどそのころ稲刈りが始まっていました。

復員の時は海軍二等整備兵費でした。

復員後一年間は三重農業学校の農業会講習所で

農業経営を勉強致しました。

兄も大分歩兵第四十七連隊に入隊、陸軍伍長、

内地勤務で終戦により帰郷していましたが、農協勤務でした。父は食料事務所に勤務、祖父は病床に付いていましたので、農業は母と私がやることになります。

食料事情が極端に悪くなり、都市では餓死者が出るようになり供出の割り当ても強化され、畑は大豆、甘藷、粟等田は米の供出です。農家の私の家でも、自分で耕作しながら供出を完済すると、毎年閏米を十俵ぐらい買って食べなければならぬ状態になりました。

昭和二十五年、警察予備隊福岡県雑所隈駐屯地に勤務、久留米東駐屯地を最後に昭和二十七年十月三十一日に退職して、実家の農業一筋に専念しました。

昭和三十二年九月、三十二歳で朝倉光子と結婚して、志村から朝倉家に養子に入りました。朝倉家には前に養子が来ていましたが、子供達を連れて出て行ってしまいました。本家にお婆さんだけが残ったので、姪の光子を、先に養子にして一月遅れて私が迎えられた訳です。先の養子が整理して出て行ったのでほとんど無からの出発でしたが、後はお祖母さん大事に、二人で頑張りました。

家内は学校の用務員で農家の仕事は何も出来なかつたのですが良くここまでついてきてくれました。入婿の時から田も無くなっていましたので、直ぐ日雇いに出ました。当時日当が三百円で、仕事は山の仕事で、昭和三十二年からずっと平成十年ぐらいまで、森林組合が雇い主になりました。給料も組合からで、山仕事は割合優遇されたように思われます。後には何人か人夫を使って、組長のように段取りを任せられ、力仕事は若い人によってもらうようになりました。しかし組合職員ではないので社会保険が無く国民保険です。その

代わりに給料は高くただ私自身も、組合員にも、病氣、怪我にはいつも十分の注意を払いました。

今はお陰で家も何度か建て替え、田も三反半余りを購入して、約一町歩の耕作をしています。

真面目に過して来た三十年の汗の結晶により今日の平穩な家庭があると感謝しております。幸い子供、孫達と後継者にも恵まれて幸せに家内共々健康で過しております。

## 海軍軍属としてウエーク島勤務

山形県 舟山 一英

私は大正七（一九一八）年十一月、山形県豊原村（後に合併して飯豊町）の農家に生まれ、姉一人、弟六人、妹三人の男七人女三人兄弟の長男でした。下の妹は二歳でこの世を去り、他の兄弟は現在、男六人、女一人が健在ですから両親と祖父母を合わせて十四人の大家族でした。

私が小学校五年生のころ、祖母が病氣になり、毎日学校を早引きして祖母をリヤカーに乗せて往復二十キロもある医院へ通院するのが日課でした。それが二年ぐらい続いたでしょうか、祖母は全快し、私は小学校を何とか卒業しました。父親も病弱でしたので、その年は母親と二人で農業をやりました。

翌年、東京四谷の仏具店に奉公に出ました。三年、五年と経ったころ店に納入される仏壇や神棚